

企 画 書

単独で、ナイフもなく、徒手空拳で森に放り出されて、
生きていけるだろうか？

～石器時代へのタイムトラベル～～石器時代からの眩き～

打製石器だけで家や道具を作り、採集狩猟で暮らすタイムトラベル計画。その様子
を伝えるドキュメンタリー映画を制作しています



アマゾンのマチゲンガはナイフ一本あれば、一人で森に放り出しても、その素材で家、服を作り、食料を獲得して生きていける。その様子を、家、獲物、解体、魚、火、採集、旅、遊、酒、畑、衣料、筏、弓矢の15項目を、私が克明に撮った写真とイラスト、文章で表した本を45年前に「山と溪谷別冊」で出版しました。

コラムに「実験考古学・縄文人の道具を作り、使ってみた」「図説・古代人に学ぶ衣、食、住のすべて」「横井庄一さん 30年の工夫の歴史」がある。そして、「ナイフ一本で密林に放り出されたら、現代人は生きていけるか!」という、植村直己、西堀栄三郎さんらの鼎談がある。

今回、私は「ナイフもなしで、単独で、徒手空拳で、森に放り出されたら私は生きていけるのか!」を試す試みを始めている。



石器時代の家づくり、生活用具作りと採集狩猟生活。黒曜石の原石を探しナイフを作る。海岸または河岸で、石をぶつけ合って打製石器を作る。その石器で木や竹を切り、木の工具をつくり、家を建て、かまどを作る。狩猟、採集に必要な罠、漁網作り、料理のための火おこし棒、石臼作り。樹皮、蔓、根を使って紐を織う。籠、敷物、鹿皮の鞆と、革紐作り、その他衣類、履物(草鞋など)作りなど地下資源を使わない、生物資源利用だけの持続可能な家づくり、道具作りを追求していく。そして、生き抜くために、獲物、魚介類、昆虫とその幼虫、野草、木の实、きのこをとって暮らす。



期間 2023年1月～2025年10月

場所 ●東京西部の森（針葉樹林）、●新潟最北部山熊田の森（混交林）、
●北海道二風谷（混交林）、●沖縄先島諸島（亜熱帯林）●真鶴半島（温帯海岸）

■新たな旅の目的地は「旧石器時代」

そんなわけで、私の新たな旅が始まりました。今度は、グレートジャーニーのように空間を移動する旅ではなく、時間を遡る旅です。縄文時代より更に古い時代へ遡ってみる、という言わばタイムトラベルのような旅で、思い切ってマンモスハンターの時代に遡ってしまいます。

では一体どうやって旧石器時代を目指すのか。まずは石を砕き、打製石器を作るところから始めます。その石器で木を切り、植物繊維で紐を撚り、柱や屋根をしつらえ、杉皮や茅、ススキ、芝土で屋根を葺き、家を建てます。そしてその家に寝泊まりしながら、水を汲み、木の実や山菜を集め、魚介類を捕り、シカを捕獲して黒曜石のナイフで解体し、火を起こし、調理して食べ、排泄します。すべての材料を自然から集め、徒手空拳で暮らしをたてます。



近年は DIY (Do it yourself) がブームですが、私は何も持たずに森に入り、旅としての DIY をやってみたいのです。暮らすためには、皿、水筒、罌、食糧を運ぶためのカゴ、敷物、袋、魚網など、たくさんのものでなければなりません。テクノロジーを旧石器時代のレベルに限定し、初期人類のものでと採集狩猟生活に挑戦します。そうして徐々に技術を習得しながら、自給自足の暮らしをしてみたいと考えています。

■マチゲンガ族に憧れて

発想のヒントは、アマゾンの先住民たちの生活様式でした。私が 20 代のころ、初めてマチゲンガ族の人々と出会ったのですが、彼らは鉄のナイフ一本で生活のためのあらゆる仕事をやってのけました。仮に見知らぬ森に放り出されても、そこで、衣食住すべてを森で調達した材料だけで作ります。彼らほど自然と一体となって暮らしている人々はいません。身軽で、潔くて、自由。その姿に当時の私は大変感銘を受け、今も敬意をいただいています。私の原点とも言える体験です。



ずいぶん長い付き合いの中で、鉄のナイフがあれば私も近い生活はできる自信があります。では石器だったらどうでしょうか。彼らもおそらく未経験です。そもそも石で木を切り、暮らしている人類はもう地球上にいません。なぜなら、どんなジャングルの奥地に行っても鉄器だけは流通しています。鉄の恩恵を受けていない人類はいないし、一度鉄の威力を知ってしまうともう手放すことはできないでしょう。それほど鉄の発見は人類にとって革命的でした。

ならば、あえて鉄を使わないルールを課して暮らしてみてもはどうだろう。そうすることで鉄以前の時代の、太古の人類へ思いを馳せることができるかもしれない。私は居ても立っても居られなくなりました。

■石器だけで家を作り、暮らす

旅は 2022 年 4 月、新潟県糸魚川の海岸での石探しからスタートしました。その後、東京の奥多摩の森で土地を借り、家づくりに着手。わかっていたことですが、とにかく素材集めに苦労します。打製石器で木を伐るのは、細い木でもだいたい半日から 1 日かかるのです。(3 日かかったこともありましたが) 試行錯誤を重ね、竹を切る方法を見つけてからは随分効率が上がりました。材料を組むための紐は、和紙の原料として有名なコウゾの皮を剥いで扱います。季節によって利用できる植物や状態が変わるため、こちらの思惑どおりには行きません。自然の都合に合わせた知恵や工夫が必要です。



非常勤の病院勤めをしながら、空いた時間は森に通うという生活をつづけ、2023 年の秋になんとか家が住める程度の形になりました。そこで実験的な居住を経験しました。その時は水とドングリのみで 5 日間過ごしました。

さらに冬にも居住を行い、その時は猟師さんから 60kg の鹿をゆずってもらい（まだ狩りのための道具がないため）、黒曜石のナイフで解体しました。土器はないため、アマゾン風に燻しました。雑木を切って高さ 70cm のヤグラを組んで、その上に解体した肉塊を載せて弱火で 20 時間燻しました。



■東京を飛び出し、全国へ

東京の森で始めたプロジェクトでしたが、欲張りな私は、次第に「どうせなら日本各地でやってみたい」と思うようになりました。日本列島は南北に長く、亜寒帯から亜熱帯まで多様性に飛んだ気候風土です。日本の原風景が残っているような土地、伝統的な暮らしをしている人々を訪ねます。北から南まで、石器時代人のように遊動して、その土地ならではの自然の恵みを見つけ、住居を作り、食べ物を調達しながら暮らしてみようと想いました。

そんな思いから、まずは今年の4月に新潟県北端のマタギの村、山熊田を訪ねました。山熊田は、狩猟採集の文化が今も色濃く残る地域です。季節によって、猟師が熊を撃ち、獲物を村の人々で平等に分け合ったり、シナの木の花から美しい織物を作ったり、トチの実で餅を作ったり。道を歩けば、いたるところで山菜が採れます。山を焼いた畑で赤カブを育てます。その営みの美しさ、自然と人の距離の近さに惹かれ、20年以上通ってきました。



今回は、いつもお世話になっている人々に知恵を借りながら、家づくりを進めています。
さらに魚の捕り方、編みカゴの作り方、食べられる野草や利用できる植物の知識などを教わりながら、少しずつ自分でできることを増やしていくつもりです。

こんな具合に、さまざまな場所に移動しては暮らす、という取り組みを積み重ねていく予定です。新潟山熊田の他に、北海道二風谷や沖縄など環境が異なる場所を想定しています。家の材料、食糧、出会う人や景色も変わっていくでしょう。きっとさまざまな気づきが私を待っていると思います。

何をするにも時間がかかり、途方に暮れることもしばしばありますが、逆に時間をかけさえすれば辿り着けるものもあります。もちろん完璧な旧石器人になることは叶いませんが、私が少しでも旧石器人に近づいたころ、私にどんな変化が訪れ、どんな景色が広がっているのでしょうか。もしかしたら現代社会を捉え直すためのヒントが得られるかもしれません。そんなことを楽しみに、時間を遡る旅を続けています。

石器野吉晴

